

藤原道長の栄華ふじわらのみちなが えいが

寛仁かんにん二（一〇一八）年十月十六日、今日は、（後ご一条天皇いちじょうの）女御にようご（后きさきに準ずる女性）である藤原威子いしを皇后こうごうに立てる日であった。（威子いしは）前太政大臣（藤原道長みちなが）の三女である。一家から三人の后を立てるのは、いまだかつて（例の）ないことである。

……太閤たいこう（藤原道長）が私（藤原実資さねすけ）を呼びよせて言った。「和歌を詠よもうと思う。必ずその歌を受けて和歌を詠むように」。（私は）答えて言った。「どうして詠まないことがありましょう。」と。また（道長が）言った。「（自分のことを）ほった歌である。ただし、あらかじめ作っておいた歌ではない。」と。

この世はわが世と思われる。満月が欠けていることもないことを思うに。

私は申しあげて言った。「御歌はたいへん優れたものです。受け答えの歌を詠もうにも、どうしようもありません。この場の皆みなで、ただこの御歌を唱しやう和わしましょう……」と。……